ELECTRONIC AUDIO EXPERIMENTS

TOUCHÉ AMORÉ®

Technical Manual

Limelight

Version 2

February 21, 2022

John W Snyder

1 Introduction

Electronic Audio Experiments × Touché Amoré "Limelight"をご購入いただきありがとうございます。このマニュアルはペダルを適切に理解し楽しむための詳細なガイドになっています。この先には、Limelightをデザインする上でのストーリーや文脈が記されています。もしペダルの使い方や機能をすぐにご覧になりたい場合は、操作方法の章をご覧ください。

Limelightはロサンゼルスのポストハードコアバンド"Touché Amoré"とのコラボレーションペダルで、2020年に発表された彼らのLP"Lament"に先立って考案されました。彼らに会ったのはその数年前、Zachの昔のバンド（RIP Animal Flag）がオープニングアクトを務めたボストンでのライブが初めてでした。そして2019年、LPと連動してそのサウンドを方向付けるような"シグネイチャー"オーバードライブを作れないかと、彼らから提案があったのです。

個人的にこのジャンルにおける模範だと今なお感じている彼らの2nd LP"parting the sea between brightness & me"に出会って以降、私はTouché Amoréの楽曲を聞き続けてきました。特に感銘を受けているのは、彼らのギターサウンドへのユニークなアプローチです。ギタリストの Nick SteinhardtとClayton Stevensは共にシングルコイルのギターをアメリカンスタイルのアンプで鳴らしており、一般的なパンク・ハードコアのサウンドに比べて極めてローゲインで、鈴鳴り感のあるサウンドが特徴です。これによって彼らは獰猛なリズムセクションを背景に、最大限クリアにメロディックなパートを演奏することができるのです。

とにかく、私は彼らからの誘いがあったころには既に、彼らの追い求めるサウンドをよく理解していました。当時NickとClaytonはBluesbreaker系とTS系のペダルを使っていて、最初は既にあるEAEのペダルを当てはめることも考えましたが、彼らにとってLongswordはあまりにも力強く、Halberdは逆に色付けが足りず、コンプレッション感も足りないように感じました。そこで私たちは、開発のスタートポイントとしてBluesbreakerを選択したのです。欠点はあるものの、オリジナルのBluesbreakerは優れた設計の回路を持っています。特にクリッピングアンプ部は極めてクレバーにデザインされていて、一つのポテンションメーターで、連動する二つのオペアンプをコントロールできる設計(*1)になっています。私たちはここを起点にいくつかの回路をがらりと変えて、クリッピングをよりラウドでダイナミックにしたり、彼らのバンドサウンドに合うようにいくつかのトーンコントロールを組み合わせたりしました。個人的にお気に入りなのがFocusトグルで、プロトタイプではNick/Claytonスイッチとも呼んでいました。最後にはうっすらと低域をカットする独立したクリーンブースターを最前段に加え、汎用性の高い2つめのゲインステージを作ることも可能にしました。

技術的なことはさておき、2020年の初め頃にはLimelightのプロトタイプをバンドに渡し、それから間もなく彼らは"Lament"のレコーディングに入りました。プロトタイプがこのLPにおけるギターサウンドの核を成す傍らで、私たちは生産に向けていくつかのマイナーチェンジを施し、こうして最初のLimelightがリリースされたのですが、このペダルは彼らのファン以外からも好評を得ることができました。これは嬉しい誤算でした。そこで私たちは、EAEが今持つ技術を加えて新しいバージョンのLimelightを作り出したのです。

私たちの誇りであるLimelightを楽しんでいただけたら幸いです。読んでくれてありがとう！

- John (EAE) and Touche Amore

PS-このペダルのグラフィックデザインに注力してくれたNick Steinhardtへ特別な感謝を送ります。Touché Amoréの強烈なヴィジュアルランゲージを、私たちのペダルに乗せて届けることに興奮しています！

(*1)Shredmasterの核となる部分にも同様の回路が使われており、Radioheadのファンとして、より一層この回路で試して見たいと思いました。ちなみにこの回路はカルトクラシックなデスメタルアンプ、Ampeg VH140Cにも使用されています。

2 Product Changelog

Version 2

2022年2月リリース

- 筐体を縦型に変更しました。
- 回路に様々な改良を加え、ノイズの低減やバイパススイッチングの改良を行いました。

Version 1

2020年リリース（オリジナルバージョン）

3　I/O and Power

Bypass: BoostとDriveで独立したリレーベースのバイパススイッチングを採用しています。電源を落とすと自動でバイパスへと切り替わります。

入力インピーダンス@1KHz: 500kΩ（BoostとDriveで共通）

出力インピーダンス@1KHz: 1kΩ以下（Boostのみ使用）5kΩ（Driveのみ使用）

Limelightを起動する際は信頼できる9VDCセンターマイナスのパワーサプライを使用してください。BoostとDriveの両チャンネルをONにした際の消費電流は80mAです。100mA以上の供給が可能な、アイソレートされた電源の使用をお勧めします。

4　Controls

Boost: Boostチャンネルのゲインを0dBから+21dBの範囲で調整します。

Gain: 二つのゲインステージを同時にコントロールします。時計回りに回すことで中域がナチュラルにブーストされながらゲインが上がり、最大でおおよそ50dBのゲインとなります。

Tone: ローパスフィルターのカットオフ周波数を調整します。時計回りに回すことでより高域が強調され、反時計回りで高域が抑えられます。

Volume: 出力の音量を調整します。

Focus: ドライブセクションでのローカットをコントロールすることで、鈴鳴りや中域の存在感を調整します。

Drive(左フットスイッチ): DriveチャンネルをONにします。

Boost(右フットスイッチ): BoostチャンネルをONにします。

5 Detailed Operating Instructions

Limelightの操作は実に簡潔です。DriveとBoostの二つが一つの筐体にまとまっていて、BoostチャンネルからDriveチャンネルへと接続されています。まずはDriveチャンネルから見ていきましょう。

Driveチャンネルは多くのギタリストにとって親しみのある、クラシックなGain/Tone/Volumeコントロールを備えています。Gainノブは二つのゲインステージを同時にコントロールすることで、わずかなドライブからフルなディストーションまで、幅広いゲインレンジを生み出します。Gainを上げていくと共に中域がナチュラルにブーストされる為、強く歪ませてもサウンドが濁ることはありません。ToneとFocusではそれぞれ高域と低域を調整することができ、Limelightではこの二つを組み合わせてトーンをコントロールします。Toneコントロールはベーシックなローパスフィルターで、高域の成分をどの程度出力するかを設定することができます。Focusコントロールはゲイン段の前で低域をコントロールすることで、タイトでキラキラとしたドライブや、フルレンジでスムースなドライブへと設定が可能です。Focusの設定によってあまりにも高域が出すぎた場合は、Toneノブで調整すると良いでしょう。Volumeノブはその名の通り、音量を調節します。そしてLimelightもEAEらしく、かなりの大音量を出力することができます！

Boostチャンネルはかなりシンプルです。最大21dBのクリーンゲインを加えることで、LimelightのDriveチャンネルやアンプの入力など、後段に繋ぐものを強くブーストすることができます。ここでは200Hz以下への穏やかなローカットがかかっており、Boostの設定が強くなるほどローカットのかかりもハッキリとしてきます。これによってBoostを他のドライブにスタックさせた際に、過剰な低域でサウンドが破綻してしまうことを防ぐことができます。またBoostノブを下げ切りにすることで、このチャンネルを完全にトランスペアレントなバッファーとして使用することができます。

このBoostチャンネルをDriveチャンネルを片方だけ、もしくは両方使用することで、Limelightは3種類のゲインレベルを扱うことができる、極めて融通の利くドライブとして使うことができるのです。

Document Revision History

Version	Changes
1	Release for Limelight V2